

Vol  
198

## 分散投資の“落とし穴”～「幅広く投資すれば安心」は本当？～

資産運用の基本としてよく耳にする「分散投資」。様々な投資対象に幅広く投資するとリスクが抑えられる、そのように認識している方も多いのではないのでしょうか。

しかし、ただ“幅広く投資する”だけでは、本当の意味での分散にならないこともあります。今回は、この“落とし穴”について、考えていきたいと思います。

どんな分散投資が本当に効果的なのか、一緒に考えていきましょう。



## 「分散しているつもり」が危ない？下落時には一斉下落も

たとえば、米国株式ファンドに投資している方が、日本株式ファンドやその他の国・地域の株式ファンドに追加投資したとします。「地域を分散しているからうまく分散できているはず」と思っている、実際には世界経済や金利動向などの共通のリスク要因による影響を受けやすく、下落局面で一斉に下落する可能性があります。

このような状況を避けるためには、それぞれのリスク要因をしっかりと把握して分散させ、値動きの特性が異なる投資対象を選んでいくことが重要になります。目論見書には各ファンドのリスクが載っているものの、それらを正しく把握し、各ファンドの違いを理解するのはなかなか難しいかもしれません。

それでは「有効な分散投資ができているか」をもう少し簡単に測る方法はないのでしょうか。—— そのヒントとなるのが「相関係数」です。

似たような値動きをする投資対象ばかりでは、いくら数を増やしてもリスクは集中したままになってしまいます。

「分散している」と思っている投資対象も、実は同じ方向に動いているかもしれません。



## 「相関係数」を意識しよう、分散の「質」を高めるための一つの視点

相関係数とは、2つの資産間の値動きの連動を表す数値であり、1から－1の範囲で表されます。そして1に近いほど同じような値動き（正の相関）に、－1に近いほど異なる値動き（負の相関）になることを表します。

分散投資の効果を高めるためには、相関係数の低い資産を組み合わせることが重要です。これにより、リスク低減効果や効率的なリターンの獲得が期待され、より安心して資産形成に取り組むことができます。

たとえば、以下が世界株式と主要資産の相関係数を表形式でまとめたものです。

●世界株式と主要資産の相関係数と特徴 （1999年12月末～2025年6月末、円ベース）

|       | 世界株式  | 特徴                                     |
|-------|-------|----------------------------------------|
| 米国株式  | 0.97  | 値動きはほぼ同じ。 <b>分散効果は限定的。</b>             |
| 日本株式  | 0.76  | 値動きは似ている。 <b>分散効果は限定的。</b>             |
| 世界リート | 0.72  | 値動きは似ている。 <b>分散効果は限定的。</b>             |
| 日本国債  | -0.13 | 値動きはやや逆の動き。 <b>リスク分散に有効。</b>           |
| 世界国債  | 0.57  | 値動きの相関は比較的低い。 <b>近年は株式と同時に下落する場面も。</b> |
| 金     | 0.23  | 値動きの相関は低い。 <b>リスク分散に有効。</b>            |

世界株式：MSCIオール・カントリー・ワールド・インデックス（配当込み）、米国株式：S&P500指数（配当込み）、日本株式：TOPIX（配当込み）、世界リート：FTSE Nareitオール・エクイティ・リート指数（配当込み）、日本国債：FTSE日本国債インデックス、世界国債：FTSE世界国債インデックス、金：金スポット価格、日本株式と日本国債以外は米ドルベースの指数を日興アセットマネジメントが円換算。相関係数は、月次騰落率をもとに算出したもの。信頼できると判断したデータをもとに日興アセットマネジメントが作成。上記は過去のものであり、将来の運用成果等を約束するものではありません。

一般的に、株式と債券は逆の動きをすることが多いとされてきましたが、近年では株式と債券が同時に下落する場面も見られます。両者は分散先として有効である一方で、一定の相関があることも意識しておくとよさそうです。



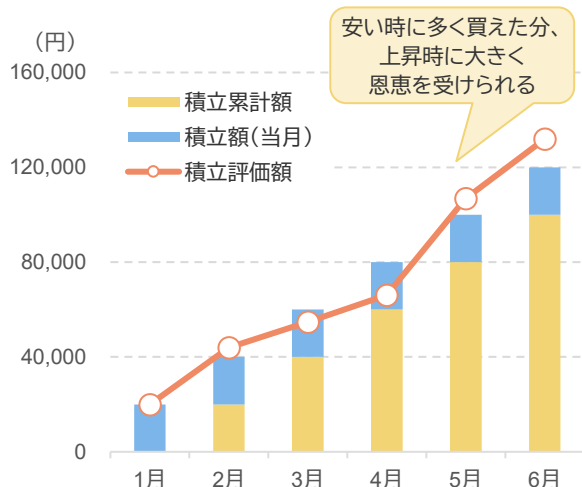
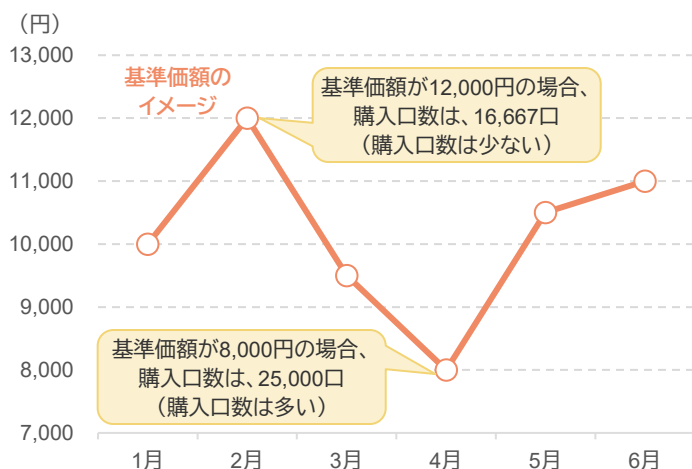
## 「分散＝安心」ではない、大切なのは「数」ではなく「値動きの違い」

「幅広く投資すれば安心」と思われがちな分散投資ですが、ここまで見てきたように、資産の数を増やしても十分な分散効果を見込めないことがあります。分散投資の本質は、「数」ではなく「値動きの違い」に注目することです。

注意しておきたいのは、相関係数は値動きの違いを数値で把握できる有効な手段ですが、過去の関係性が今後も当てはまるとは限らない点です。実際、近年はグローバル化の進展により、地域間の経済連動性が高まり、地域分散の効果が薄れつつあるという指摘もあります。そのため、資産の種類(株式・債券・金など)や地域といった投資対象だけでなく、投資のタイミング(時間分散)も意識することが重要でしょう。

たとえば、毎月一定額を積み立てる「ドルコスト平均法」は、価格変動の影響を平均化し、高値掴みのリスクを抑える効果的な時間分散の手法です。

●ドルコスト平均法のイメージ(毎月2万円を積み立てた場合)



※「ドル・コスト平均法」をご説明するために簡略化したものであり、実際の投資成果とは異なります。また、簡便的な計算のため、購入時の手数料等は考慮しておりません。

相場の先行きが不透明な今だからこそ、資産・地域・時間の3つの分散軸を意識した投資が、安定した資産形成につながると考えられます。

ご参考にしていただければ幸いです。



nikko am

コールセンター

0120-25-1404

営業時間 平日 9:00~17:00

日興アセットマネジメント